

保元・平治物語

・西尾実・久松潜一監修

保元・平治物語

久徳高文

私たちの日本古典文学

さ・え・ら 書房

カード記載例

918		
き	久	徳高文 保元・平治物語 東京 さ・え・ら書房 昭和33(1958) 270P 図版 22cm (私たちの日本古典文学 9) ¥ 380.

著者略歴 1913年三重県桑名市に生れる。東京大学文学部国文学科卒業。中古中世文学専攻。現在名古屋市立女子短期大学教授。



(私たちの日本古典文学 9)
保元・平治物語

定価三八〇円

著者 久徳高文

発行者 浦城光郷

オフセット印刷 伊藤集美堂

印刷 文弘社

製本 阪井製本

東京都文京区白山御殿町一二一

発行所 さ・え・ら書房

電話小石川(92)二三八一番
振替東京八七二四四番

昭和三十三年十一月八日 第一刷発行

㊦

は し が き

みなさんは「源平試合」ということばを知っていますね。何か競技か遊びをするときに、敵と味方の集団にわかれて、戦う形を、こんなふうに言いあらわします。敵と味方を区別する目じるしとして紅白の二色を使い分けるので、「紅白試合」とも言いますが、「紅」は平家の旗の色ですし、「白」は源氏の旗の色なのです。

いずれにしても、敵味方という意味を「源平」とか「紅白」というように言いあらわす方法が、二十世紀のこんにちでも盛んに用いられています。「保元物語」「平治物語」は、このような源平二氏の対立抗争を題材にしてそれを側面からえがいた作品です。

いったい人間として、この世に生をうけた者は、だれでも幸福を願わない者はないでしょう。その幸福を求める気持が、時には他人を傷つけるだけではなく、自分自身で、悲劇の主人公になることさえあります。

保元物語・平治物語は、このような人間性の真実を、内乱という歴史的な事実をえがくことによつて、するどくえぐり出して見せてくれます。

ここに登場する多くの皇族が、貴族が、武家が、単純に階級的な鋳型にはめこまれたまま、えがかれているかどうか。なぜ、父と子、兄と弟、叔父と甥という濃い血縁関係の間で、敵味

方にわかれて死をかけてまでの闘争とうそうをくりひろげなければならぬのか。派閥はばつというものは、
どういう経路で形づくられていくか。——これらの点について深く読みとっていただきたいと
思います。そうすることが、古典を現代に生かす道にも通じるわけです。

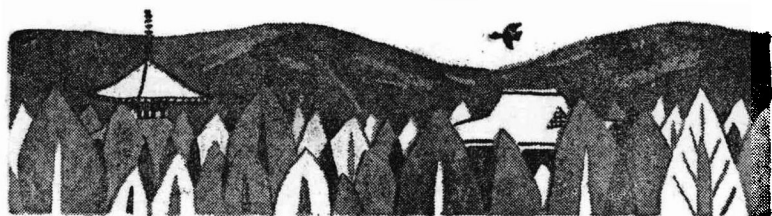
戦争を扱った文学作品は、とかく事件の興味に注意をうばわれて、その本質を見失いやすい
ものです。保元物語・平治物語でいえば、たとえば源為朝みなものためともの勇壮な生涯しょうがいとか、待賢門の重盛しげもり・
義平合戦よしひらの場とか、常盤御前の都落ちとかは、むかしからいろいろの読み物に抜き出されてい
るために、その部分だけで何か意味のある独立した一編のように思いがちですけれども、その
ような読み方・受け取り方は、たいへん危険きけんです。やはり全体の流れの中に正しく位置づけて
作品の主題をはっきりとつかんでください。

前に、これらの物語は、源平二氏の対立抗争を「側面そくめんからえがいた作品」と述べましたが、
これを言いなおして「初期のころをえがいた作品」とした方がいっそう正確になるかもしれません。
この点については巻末の「解説」をお読みねがいます。

なお、この本は流布本るふほんを主として用いましたが、古本の一部をとり入れた所もあります。
また、巻の分け方は、必ずしも原本のままではありません。しかし、主題の流れについては、
どこまでも正しくたどることができるようにまとめたつもりです。

昭和三十三年十月

久 徳 高 文



もくじ

はしがき.....一

保元物語

〔巻上〕

いとぐち.....八

上皇のお心.....四

頼長の野心.....五

戦雲動く.....二

頼長の陰謀発覚.....四

上皇、白河殿へ.....六

為義、白河殿へ.....六

為朝の武勇.....三

天皇方の勢ぞろえ.....三

〔巻中〕.....四

義朝、白河殿を襲う.....四

義朝・為朝の血戦.....五



白河殿焼討ち

上皇の脱出

頼長の遁走

勝敗きまる

頼長の末路

残党狩り

為義の降参

為義の最期

義朝の弟どもの処刑

〔巻 下〕

義朝の幼い弟どもの最期

為朝夫人の自殺

上皇、讃岐へ

島の敗帝

為朝、捕えらる

為朝、大島へ

伊豆の為朝

為朝の死

六

五

六

七

八

九

一〇

一一

一二

一三

一四

一五

一六

一七

一八

一九

二〇



平治物語

〔巻上〕

いとぐち	二四
信西と信頼	二五
両雄ともに立たず	二七
信頼、義朝と手を結ぶ	二八
三条殿不意討ち	二九
義平、京に上る	三〇
信西の都落ちとその最期	三一
清盛、急ぎ京に帰る	三二
光頼の正義感	三三
上皇・天皇の脱出	三四
信頼のおどろき	三五
義朝方の勢ぞろえ	三六
〔巻中〕	
六波羅会議	三七
源平二氏、戦端を開く	三八
待賢門の戦い	三九



郁芳門の戦い	一八五
六波羅の合戦	一八七
頼政、裏切る	一八九
義平の奮戦空し	一九一
義朝の都落ち	一九六
信頼の敗走とその最期	二〇一
義朝一家の敗走	二〇五
義朝の最期	二〇九
忠致父子、功績を売る	二一四
〔巻 下〕	
義平の死	二二七
頼朝、捕虜となる	二三四
池禅尼の慈愛	二三七
常盤の都落ち	二三三
常盤、都に帰る	二三七
源氏、ふたたび興る	二四〇
解説	二四四
系図	二四六
さくいん	二六三
三四年表	

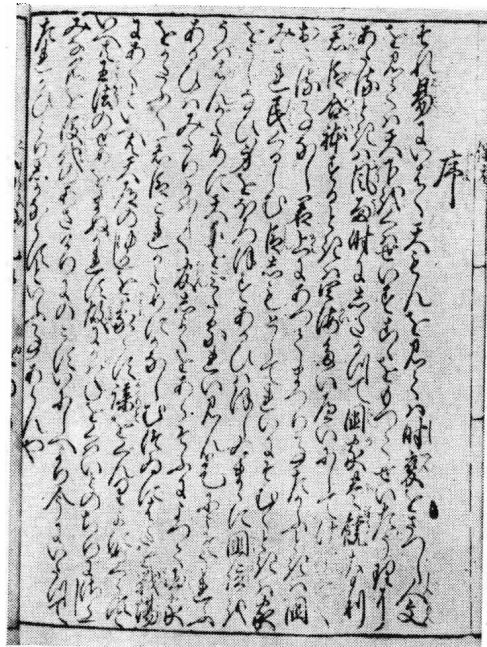
保元物語

保元物語 卷上

いとぐち

鳥羽天皇は堀河天皇の第一皇子としてお生れになり、五歳の時、父帝がおなくなりになりましたので、その後をうけて第七十四代の天皇の御位におつきになりました。御在位十六年の間、御祖父白河法皇のお力添え（院政）により太平無事の政治をお布きになり、国民の生活は大いにうるおいしました。御年二十一歳で、御位を第一皇子崇徳天皇に譲って、上皇におなりになりましたが、二十七歳の時、白河法皇がおなくなりになりましたので、かわって院政をおとりになることになりました。忠義の臣下に対しては厚く恩賞をお与えになり、また罪を犯した臣下に対してもやさしい態度でお許しになりましたので、国民はみなひとしく上皇の御慈愛に感激して仕事に励み、毎日々々平和と幸福に満ち足りた生活を送ることができました。

さて、崇徳天皇の御代も十七年ほど続きましたころ、鳥羽上皇と美福門院という女御（おきさき）との間に体仁親王がお生れになりました。上皇にとっては第五皇子、崇徳天皇にとっては異母弟にあたられます。上皇はこの皇子をとりわけ深くおかわいがりになり、さつそく生後ま



保元物語 版本巻頭

だ三か月というのにもう皇太子にお立てになりました。そのあくる年に、天皇には第一皇子重仁親王がお生れになりましたけれども、どうすることもできません。第一皇子があってもその皇子には将来の天皇の地位が保証されていないわけですから、天皇の御心中はどれほど残念であつたでしょう。

そういう天皇の無念さを、もつとはげしくかき立てる事件がおこりました。それは皇太子体仁親王がお年三歳の時のことでした。法皇——この年に上皇は仏門におはりになりましたので法皇と申します——は、天皇に迫つてむりやりに御位を譲れとおっしゃったのです。権力のあ

る法皇のおことばですからそむくわけには参りません。悲しみと憤りの涙をおさえて天皇は退位し、上皇におなりになりました。こうして、体仁親王はわずか三歳という幼いお年で御即位になりましたが、この方を近衛天皇と申しあげます。

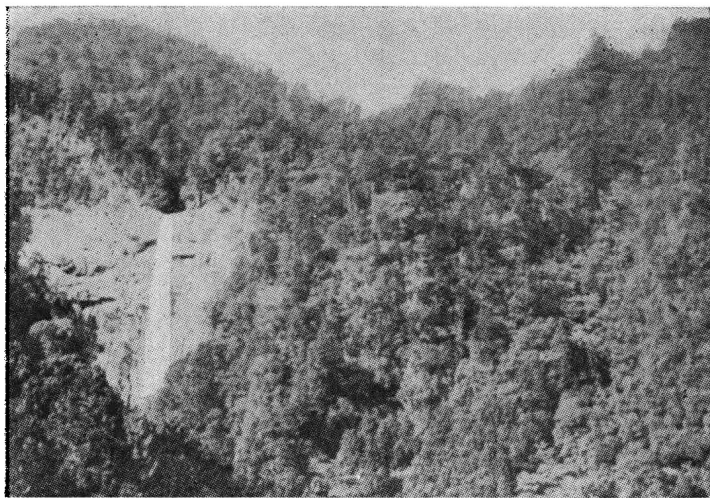
鳥羽法皇と崇徳上皇とはほんとうの父と子という間柄なのですけれども、近衛天皇をめぐるおかしな空氣がしこりとなつて、おふたりの仲に冷たく重くよどむ

ことになりました。

それでもいつしか十四年の年月は流れました。近衛天皇は、お年十七歳です。まだまだ前途には長い春秋に富んでいらっしやるのに、どうしたことか、ほんのしばらくの間の御病氣でなくなりになりました。御父法皇、母君美福門院のお嘆きの深さは申すまでもありません。

ところで、第七十七代の天皇の御位はどなたがおつぎになるでしょうか。これが、さし迫った現実の問題です。崇徳上皇としては、かつての不平不満が今度こそ自然な形で解決できるという期待をお持ちになりました。それは、御自身がもう一度返り咲くことはできないにしても、第一皇子重仁親王がきつと天皇におなりになるに違いないと、内心ひそかに楽しみにしておいでになったのです。世間の人びともみな、当然そうなることと信じていました。ところが、意外にも法皇の第四皇子で、雅仁親王と申す方の御即位ということにきまりました。後白河天皇と申すことになりますが、この方は今まであまり目立たず、ぱっとしない存在でしたので、世間では目をまるくして驚きました。

なぜ、こんな結果になったかと言いますと、そこにはつぎのような事情がかくされていたのです。すなわち、近衛天皇が若死なさったのは、崇徳上皇がひそかにのろいをかけていらっしやったからだ、そういう方の皇子に皇位がまわってはくやしい、何とか邪魔をしなくてはならない——と、こういうふうには美福門院がお考えになりました。法皇に対してしきりに雅仁親王



熊野，那智の原始林。左は那智の滝

をおすすめになりました。法皇も、これに動かされて雅仁親王を立て、とうとう重仁親王を無視しておしまいになったのです。

さあ、こうなると崇徳上皇はたまりません。十四年もの長い間の隠忍自重がようやく報いられて、胸の重苦しさが今度こそ軽くなるだろうと信じきつておいでになったのに、これではまるでトビに油揚げをさらわれたようなものです。お怒りの炎がまた一段とはげしく燃えあがったのは、無理ありません。

さて、一番深く愛しておられた近衛天皇に先立たれておしまいになった鳥羽法皇は、その年の冬、はるばると紀州路（和歌山県）にお出かけになりました。熊野権現に御参詣になるためです。熊野本宮の本殿の前で、この世のみならず来世までの幸福を一心こめてお祈りになっていますと、本殿の中に童子の姿がぼうつと見えて、ひらひら

と手を何べんも裏返して見せるようです。不思議なこともあればあるものだ、どういう意味なのか、一つ神さまのお告げをうかがってみようとお思ひになりました。そこで熊野三山の中で最もすぐれた巫をお呼びになり、神おろし、ということをおさせになりました。けれどもなかなか神さまは下りません。朝から始めて昼になってもまだ下りませんので、山伏八十余人が加わつて大般若經を一せいに読みあげて祈願をこらし、巫も一心不乱になつてお祈りをささげますと、どうにか効験があらわれました。巫がやつと神がかりの状態にはいつて、いろいろな人間離れの動作を見せ始めました。そして、法皇の方を向いて、右の手を高くあげてひらひらと何べんも裏返す形を見せます。法皇ははつとして、これは先ほど本殿の前で見た夢想の姿そっくりだ、今こそ神さまのお告げを聞こうと、お思ひになりました。そして、さつそくおすわりになつていた席をすべりおりて、お手を合わせ、

「神さまのお告げを伺いたいと思つたのは、そのことです。いったい、どういう意味ですか。」とおたずねになりますと、

「明年の秋のころに、法皇はかならずおなくなりになるであらう。そのち、国内はちやうどこんなふうに手をひっくり返したような大混乱がおきるであらう。」というお告げです。思ひもよらないたいへんなお告げなので、法皇は申すに及ばず、お供の人びともみな涙を流して、

「それでは、どうすれば法皇はもつと長生きなさることができますか。」とたずねますと、

「寿命の長さは前世からきまつているから、どうにもしようがない。」と答えて、神さまは天

に上つておしまいになりました。

こんなお告げを親しくお聞きになった法皇のお心細さは、どれほどであつたことでしょう。いつまでも長生きして何回でも熊野権現に参詣することを、ずっと楽しみにしておいでになりましたが、はからずも今日の参詣が最後になるのだとお思いになると、今はもうほかに何の希望もなく、ただ安樂に極樂往生できるようにというお祈りをおささげになるばかりでした。

さて、明けの年は四月に年号が改まつて保元と呼びます。このころから法皇の御健康は、とかくすぐれなくなりました。世間では、近衛天皇をおなくしになつたお悲しみの積もり積もつたせいかとおうわさしていましたが、法皇御自身は熊野権現のお告げがいよいよほんとうに現われたことと信じて、ありがたいやらさびしいやら複雑なお氣持でした。そして、病氣平癒のための加持祈禱といった類のことはいっさいおさせになりません。ただひたすら、極樂往生のお祈りをこめた勤行ばかりさせておいでになります。

七月二日、法皇はとうとうおなくなりになりました。七月(今の九月ごろ)になつたばかりというものの、とにかく秋の季節ですから、熊野権現のお告げはびたりと的中したわけです。お年はまだ五十四歳でした。普通ならもっと長生きして、いつまでも御政治をおとり遊ばされるはずの御年輩です。生ある者はかならず死ぬという人生のはかなさは、常日ごろだれでも感じているのですから別に驚くこともなさそうですが、今、法皇のお身の上にまざまざとこれを見ては、お側近くお仕えする人びとももちろん、世間の人もみな、今さらのように悲しみの淵に沈

むのでした。中でも美福門院のお嘆きの深さは、何とも申しあげようありません。お元氣でいらつしやったころの法皇の御面影は、まぶたに焼きついて離れることなく、昔恋しさの涙にかきくれてばかりおいでになりました。

上皇のお心

このように世間が上下をあげて法皇をおいたみ申しあげている折から、崇徳上皇はいったいこの情勢に対してどういう態度をおとりになるであらうか。一旗おあげになるのではあるまいかという不安の念が人びとの胸中に広がりました。というのは、法皇がまだ御病氣のところ、すでに上皇は御謀反をお企てになつていらっしゃるといううわさも立ち、ただうわさだけでなく、証拠として軍兵が東からも西からもあいついでどんどん京都をさして集まるし、馬や車に積みあげた武器が、つぎつぎに市内に運びこまれるなど、疑わしい点がたくさんありました。上皇方の武士は東三条殿に立てこもり、夜は相談をねり、昼間は山の上や高い木の枝にのぼつて、天皇の御所高松殿のようすをうかがい見るといふ気配も見えます。そこで、七月三日、天皇は源義朝に命じて東三条殿の留守居役藤原光貞と武士二人を召し捕らせ、事情をお調べになりました。これが法皇がおなくなりになった日の明るる日のできごとですから、よほど情勢はさし迫つていたものと見なければなりません。